
みんなせんっ！ ～知り合いはみんな先輩！？

夕風 渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みんせんっ！　く知り合いはみんな先輩！？

【Nコード】

N4004Q

【作者名】

夕風　渚

【あらすじ】

始まりました高校生活——と言っても、部活に参加するつもりはない……。

適当に、楽そうな部に入部だけしておこうか——。

って思ったら、部員は自分込で3人？　先輩二人は美少女！？　顧

問もクールでカッコイイ女教師！？

周りにいる人、みーんな先輩……！！？

キャラクター紹介

・愛媛 えひめ むつき 睦月

一人称：自分

読書部の新入部員。

前髪で目を隠したり、基本的に他者との接触を望まない。

無気力、無関心を装うも、根は真面目で他者との繋がりを強く求める。

放課後家に帰らない理由として、どこか適当な部に入ろうとして「読書部」へ。適当——と言っているが、本人が昔志していた小説家という夢が少し関係していたりする。

幽霊になる気でいたが、二人の先輩でハーレムじゃん？ と、毎日顔を出すようになる。

過去に使用していたペンネームは「朝倉 渚」

・神谷 かみや さとこなみ 漣

睦月への呼び方：睦月 一人称：うち

読書部の部長。高2

身長150なのがコンプレックス。曰く「本棚の最上段に手が届かないから嫌」。

ラノベ小説作家が夢で、読書部——なのに、毎日執筆作業。

ペンネームは現在思案中。

・居原田 いはらだ なぎさ 渚

睦月への呼び方：睦月くん 一人称：私

読書部の副部長。実質的には部長。

出ることが出て、引っ込むところが引っ込み——外見的には一般以上。

一年に何度か告白されたりと、ある種のアイドル的存在だが……

身長は170に近く、高いほう。身長を生かして漣をいじるのが
楽しみ。

ペンネームは「みーちゃん」

・伊達^{だて} いろは

睦月への呼び方：睦月さん 一人称：私
文芸部の副部長。2年。

物腰が柔らかく、いつも（良くも悪くも）微笑みを絶やさない。
実里と二人で運営している同人サークルでは、実質的にリーダー。
文芸部に所属しているが、絵を描くことを得意としている。

基本的に内面を学校では出さない。

渚の幼馴染だけあって、渚というはが揃ってエンジンがかかると
大変面倒なことになる。

渚があんな体型で、いろはも同じく。やっぱり、二人が揃うと面
倒事が多くなる。

ペンネームは はーちゃん

ブローグ

所属する部活を、決めていない。

入学してもう一カ月近く。入部届けの最終締め切りはもう間近に迫っている。

この高校、部活には強制参加。

どこか適当な部……………。

やっぱり、楽なのは室内部……………。

文芸部……………文章書きたくない……………。

裁縫部……………裁縫は得意じゃないし、男子なんていないだろう。

料理部……………嫌いじゃないけど、面倒……………。

科学部……………文系ですが何か。

もう一度、部活の案内板を見よう。紹介のチラシがまだ貼ってあるはず。

どこも無理そう……………。

てか、入部しても行く気はない。だったら、活動内容はどうでもいいじゃん。

でも……………大体の部は定員で応募が締め切られている……………。

残っているのは……………読書部？

ふうん……………活動内容『読書』かあ。本を読むのは嫌いじゃないし。あ、いや……………活動内容はどうでもいいか……………。

とりあえず、内ポケットに入れておいた入部届けを取り出し、読書部……………と記入する。

後は、担任に提出。一回目の部活だけ顔を出せばいいだろう。

「聞いた？ 漣」

「何を……………？」

「新入部員一名。入部届けを受理しました——だって」

ピタリ——と、部長の手が止まり、重要な情報を教えてくれた副部長、渚を見上げる。

「じゃあ、読書部は——」

「廃部を免れました——と言っても、部員数三名は少ないけどねえ……」

喜びつつも、落胆の表情を見せる漣。

本を読む手を止め、喜びに目を輝かせる渚。

一つの教室丸ごとある部室。せめて、元からある椅子の半分は埋まってほしかった——とは、喜びにあふれる漣の前では——言えなかった。

移動教室である。

第一理科室は——どこだっけ？

近くの教室の時計は、授業開始まで残り少ない事を現している。

「……誰かに聞くしか——」

「……一年？」

意思を固めた直後、不意に後ろから声をかけられる。

振り返って——。えっ、と声が漏れる。

身長が——高い。

170センチある自分よりも高い——じゃあ180〜190センチってところか？

着ているのはスーツだから……教師ってことか。

短めの髪と、ほんの少しか光を映していない黒目。

言っているのか分からないけど——絵にかいたような無口キャラ。そして、少し高圧的な雰囲気醸し出している。

「……ああ。読書部の新入生クンか………確か、三組だ

よね？ 次、理科——もしかして、迷った？」

「えっと、はい」

どこに対しての返事なのか。自分でも分かっていない。

「——理科室は、中央階段を上った三階……そこから、特別教室棟に入ったら分かると思う」

脳内で地図を再生……。大体、分かった気がする。

「……じゃあ。また、近いうちに」

「あ——ありがとうございます」

何と言つか、身長差からか、圧倒されっぱなしだった。

良い人、なのかな……？

つと……急がないと——って！

「っ……」

「ひゃうっ！」

曲がり角。急に表れた人影。ぶつかる寸前に後ろに下がる。

「えっと……ごめんなさい」

頭を下げようとしたが——。

「あ、うん。大丈夫だよ。顔、上げて」

そう言われ、顔を上げて——改めて、ぶつかる寸前だった人を見る。

「……」

息を、のんだ。

制服の上からでも分かる体の曲線。

こちらが悪かったのに、怒りを表すどころか、零れんばかりの笑みをかけてくる。

少し茶色い目。高くもなく、低すぎない鼻筋がスツと通って——。

ほんの少し朱色の頬。

学年色から見て、一つ年上。こんな先輩、いたんだ……。

「じゃね」

音符が付きそうな、跳ねた声と共に、横を通って行く。

髪から香るシャンプーの匂い――。

授業には遅れたけど、それと差し引いて問題なし――自分としては。

でも……失敗したなあ。

改めて、前髪で目を隠す。自分からは周囲が見えているが、他の人間から見たら、目が見えない。

一応、こちらからは目は合う。でも、相手にとっては目が合ったとは認識できない。

他人と目を合わせる気はないから――。

そもそも、必要最低限人と関わりたくなかった……。

あの教師は問題なし。教師と知り合っておいて損はない。一応。ただ――眼福ではあったが、あの先輩。

正直――関わらなくても良かった……いや、自分が悪かったか。

はあ……現実では、無気力無関心を装う――決めた事。

階段にある大きな鏡で確認。目は――隠れている。OK

1話 再会

ついに、来た。

最初で最後の部活。

部活棟の最上階——三階の一番奥の教室。

「失礼しまーす……………え……………」

え、と声が零れた。

「あれ？ 新入部員って——あの子なんだあ」

この前、廊下でぶつかりかけた先輩。

「来た……………か」

窓際、長い脚を組む教師。ほんの少しこちらに目をやって、すぐに手元——本に視線を落とした。

あの時、第一理科室の場所を覚えてくれた教師。

にしても——これだけ、なのか？

あの教師は顧問だろうから除く——除いても、先輩が一人だけ？

この広い教室……………いや、人数と置いてある物が少ないからそう思うのか。

置いてある物——と言ったら、前のほうに長机。長いほうを合わせ、それを横に三つ合わせたのと、椅子が四脚。二十脚以上の余りは後ろ、適当に置いてあった。

「とりあえず、座りなよ」

先輩が指で差した場所。先輩の向い側で、黒板を背にしている。

「後もう一人、もうすぐ来るからね」

って事は——総部員数三名？

部活として認められているのか……………？

「噂をすれば……………」

ポツリ、と教師が呟くと同時。

「悪い、遅れた！」

教室のドアを蹴破らんかの勢いで突入してくる人影あり。

2話 自己紹介とカミングアウト

「えー……では、読書部第一回ミーティングを始めます。自己紹介！」

誰から？ そんな雰囲気。
ちなみに。

さっき突入してきたのはこの部長。

身長は150センチ程で、まあ若干小さいなあ……と普通なら
思えたが。

身長が極端に大きい人もいるので、数値以上に低く思える。

と言うか……ツインテールで、全体的に活発そうな感じだからそ
う思うのかも。

「あー……年齢順で。上からね」

「私……？」

誰も名乗りを上げない事にしびれを切らしたか。

「あ……うん。自分は白神舞火………日本史の教師。ここの顧問」
そう言う一時だけ、本を閉じてこちらに向き直る。

初めて、真っ直ぐに。しかも、こちらの目の位置が分かっている
のか。

凜としつつも、どこか優しげに思える目で射抜かれる。

「えと——私は居原田渚。ここの副部長ね」

「そんでもって、うちが神谷漣。部長だよ」

そして、全員にジッと見つめられる。

あー……はいはい。

「愛媛睦月です——」

「ねえ」

向い側。居原田先輩が、真っ直ぐにこちらを射抜く。

「髪、上げてみて」

目の周囲を指差される。

目を、晒せ——と。

初めて、だなあ……。他人からそんな事を言われるなんてくつ、と手で前髪を上げる。

「……………わお」

「あの……………もういいですか？」

何と言つか、初めての事だし——なんか、恥ずかしい……………。

「髪切る予定ない？ 身長が高いのが難点だけど……………あ、そうか。普通に女装させればいいか！ 夏、お盆休みは開けておいてね！

ふふふ……………生きてるって素晴らしい……………男の娘を、男の娘の原石を見つけられるなんて——」

ぐふふふ——と、初めて会った時のイメージを崩しかねない笑い声が口から零れている……………。

「あー……………始まった」

神谷先輩が、ボソリ……………と呟く。

「とりあえず、渚は放っておいてね。しばらくすれば戻る。で、活動内容は基本読書だけ」

「ねえ、睦月くん！ サイズ測るからこっち来て！」

どこから取り出したのか、メジャーを持っているし——。
「……………行つてやって。聞きながらも出来るし」

要約すると、こう。

基本活動は読書。

文化祭では、文芸部と合同で本を作る。中身は本の批評でもいいし、小説を書いてもいい。ただし、最低五ページ以上。

その間、居原田先輩はサイズを測り続けた。

白神先生は—— 本を読み続けていた。横で騒いでいたのに……………すごい集中力だ。

3話 密着と前言撤回

「凄いね睦月くん……肌真っ白……羨ましい」

「いや、単にインドアだっただけで……」

居原田先輩が、制服の袖を引き上げ、自分の肌を凝視する。

「体毛もかなり薄いし——細い腕に細い指……ふふふ」

怖い。若干怖い。

体が密着して——と言うか、後ろから抱かれる状態。背中に柔らかいモノを感じている若干エロい構図。

なのに。なのに！ 怖い。若干怖いよ。

「ねえ。先生」

視界には入っていない後ろ。神谷先輩の声。

「睦月が女子の制服を着ていたら、百合に見えませんか？ 渚が攻めで」

「………確かに」

同意しないでっ！ 男っぽい——って言われた事ないし、拳句の果てには女扱い！？

「ちょ……居原田先輩——そろそろ」

「そろそろ——なあに？」

「やめて下さ——ふぁー！」

先輩の右手が伸びてきたかと思うと、自分の左頬に添え——真正面から、右へ45度、誘導される。

すぐそこに、吐息が頬をくすぐるほど近くに、先輩の顔が——

「やっぱり、肌キレイ……髭も産毛程度しかない——ニキビは……少しあるけど、治療可能ね」

「おい渚—————そこから止めとけ」

「………つまんないの」

やっと、解放される——そう思って力が抜けた刹那。

頬を、温かくザラザラとしたもので、髭られる――。

「ふふふ……可愛いなあ」

それが、居原田先輩の舌だと気付くころには、体全身から力が抜け、座りこんでいた……。

男女男じゃないよ……女男女と書いて、なぶる――だよ……。
人は、見かけによらない――。

散々な、一日……。

でも、嫌ではなかった――。

男に二言は無い――って言うけど、男扱いされなかったので、言おう。

前言撤回！

部活、行こうと思う……。

あそこの空気、雰囲気は――好きになりそう。

4話 周囲の事を考えよう。

「部活のために学校に行く！」

そんな事を、中学で知り合いが言っていた。

今なら、その気持ちを理解できる。

現在昼休み。

運動部に所属する体育科の生徒は、午後は全て部活だが。

普通科の自分には、あと二時間。授業が待つ。

む……特にすることもない。寝てしまおうか——ん？

何やら、廊下が騒がしい。

例えるなら——。

学園のアイドルが、違う学年の階に姿を現した……みたいなの？

「おい、居原田先輩が来てるみたいだぞ！」

「マジで？ 見に行こ！」

……………。

聞いた事のある名——と言うか、一発で昨日合った事に記憶がつかなくなる。

「愛媛くん？ 愛媛くんに会いたいつて人が……」

えーと……クラスメイトの女子——名前忘れましたごめんなさい

——が、教室の後ろドアを指差す。

「……………わお」

来ました。

居原田先輩です。

「来たよ」

呼んでいません——とは言えず。

「えっと……どうして？」

後ろのドアに向かいつつ。そう、先輩に尋ねる。

「どうしてかなあ——あ、それより、これ持って」

ポン、と教科書や資料集一式を渡される。む……結構量がある。

おそらく、教室移動の途中だったのか。
で、これで一体……。

「ふふふ——それ、落とさないでね」
ゾクリ……と、その笑みで理解した——嵌められたっ！

「引つかかったあ！」

ある程度、覚悟する余裕はあったものの。
やっぱろ、平気ではなく……。

「ちょ、先輩、廊下、周囲」

単語しか、出てこない。

「くふふ」。知らない、聞こえない

当然、前から抱きつかれたので、教科書を床に落としてしまっ。

「あ……落とした、ね」

「………はい」

吐息どころか、唇が接しそうな顔と顔の距離。

先輩の、甘くて温かい吐息を感じ——。

「お仕置き、しちゃ——」

先輩の頬が緩むと同時に、何者かによって先輩の顔が遠ざけられる。

「………やるな、とは言わない。ただ、周囲を考えろ」

「あ、白神先生——」

「お前も」

「………はい」

否定できない。

冷静になって初めて気付く。

静かすぎる。それに、周りの視線。

変に温かい人もいれば、とても冷たい目をした人も——ヤバ
いよこれ。

「………人だかりを作るな。通行の妨げになる」

先生の呟きは、静かになっていた廊下に響く。

「ちえー。終わりかよ」

「もしかして、あの二人——」

「愛媛睦月——顔は覚えたぞ……」
最後の怖いよ。

これだから、係わりたくないのに……。
白神先生は今年で二年目らしいが、十分な権限を持つのか——さ
っきまでの人だかりはもう消えている。

「その………なんだ。周囲の人間も消えたし………」
？ さっきまでの無表情はどこへ。

両頬を朱に染め、手をモジモジさせて——。

「さっきの言葉はこれの布石かあ……教師権限つてずるいな」
横で先輩がボソリ、と呟く。
聞き返す間もなく——。

「………ぎゅ」
先生に、抱きつかれた！？

身長差から、先生を見上げる状態になって——。

普段の冷静で、どこか冷たい印象を持つ先生の顔が——両頬
を真っ赤にして、目を潤ませて……ほんの少し、微笑んでいた。

「じ、自分だって——教師だけど、まだ……若いし………」

視線が合つて、それを逸らしながら、ポツリポツリと先生が言う。
え……？ それって、つまり……。

「はい終了」

今度は、先輩が引き離す番だった。

「愛媛睦月……居原田先輩だけでなく、白神先生まで——」

さっきの奴まだいたよ……。

最低限、人と係わりたくなかったのに——。
なんのゲーム？ これ。

「ただいま戻りましたー……って、あれ？」

大きな紙袋を抱えた居原田先輩が、部屋に入ってくるなり今の空気を察したようだ。

「特に何もないよ。で、何？ その紙袋」

神谷先輩の顔から、乾いた笑みが消える。

やっぱり、神谷先輩は居原田先輩とのほうが接しやすいな。

「よくぞ聞いてくれた！ この紙袋の中にはコスプレ用具一式があるのだ！」

とりあえず。

嫌な予感しかしません。

6話 コスプレ

鏡の、前。

「……………」

言葉を失う、自分。

「……………わお」

本を読む手が止まった神谷先輩。

「流石……期待通りね」

ボソボソと呟く居原田先輩。

違和感が、ありすぎる。

いや、確かに自分なのだが——自分に見えない。

居原田先輩が持ってきたのは、アニメ化され、最近は映画にもなった某坂の上にある高校の制服。明るい青が基調のセーラー服。

「よし、前髪は……目が見える程度に横へ……うん。これでよし。じゃあ、次はこれ！」

そう言って次は、マントと魔女の帽子……いや、これは。

自分がするまでもなく、居原田先輩の手によって着付け完了。

「うん。身長が若干高い気がするけど問題なし！髪切ったら言うてね。次はウィッグ持ってくるから」

「あの……先輩。なんで、先輩がこれを？」

思った事を率直に。

「え？ コスプレ嫌いだった？」

「いや、むしろやってみたい——じゃなくて」

「だって、私がやろうとしたけど、胸のあたりがきついし、漣はやりたくないっ！って言うし」

「……………だから、自分に？」

「いやあゝ。ここまで似合うとはねえ……流石、線が細い！」

流石。と言われても、素直に喜べません……。

「……………パシャリ」

「ちょ、神谷先輩、何を……」

真横、先輩が携帯を構え——今の擬音から察するに、撮られた……！

「気にしないで、ブログに載せるだけだから」

「気にしますって！」

「漣のブログは凄いぞ？ この学校の生徒はもちろん、他の学校生も——」

「ちょ、それはヤバすぎますって！」

今、居原田先輩は『この学校の生徒は——』って言った！

「大丈夫。偶然見かけた——って書く」

そう言つと、神谷先輩はメモにペンを走らせた。

「はい。ブログのURLと名前。そんなに心配なら見ればいい」

「あ……どうも」

そこまで言うなら、多分大丈夫——かな？

「よし、じゃあ次の衣装に行つてみよう！」

ここ数日で何度も見た、居原田先輩の、あの笑み。

「ふふふ……じゃあ、脱ごうか。お姉さんが手伝つてあげるよあ」

「いや、一人で脱げます。大丈夫です。いや、だから、せめて下は自分で——」

「……わあ。線は細いけど、ひ弱な体系じゃないね」

神谷先輩が呟くのが聞こえるが、今は下を死守することが先決！

「なんで隠すのかなあ」。む、エッチな事考えてるでしょ？」

「考えてなんか、いませんって！」

「体は正直だねえ……どうしてここ、こんなに固くしてるのかなあ」

「ちょ、待って！ だから、そこはっ！」

……。
……。
……。

7話 決戦前……夜？

結局。

解放されたのは夕日が差し始めたころ。

タイトルの真ん中に星が付く四コマ漫画の制服や、宇宙を舞台に歌で戦うロボットアニメのヒロインの服——何着着せられ、脱がされたことか……。

あ、でも——某大きいお友達向け魔法少女アニメ、二期から登場した守護騎士リーダーの服はカッコよかったなあ……じゃなくて。肉体的疲労よりも、精神的疲労が激しい……。

そんなこんなで家に到着。

親は共働きの帰宅は深夜。妹がいるけど、全寮制の中高一貫校に在籍中。

つまり、だ。

基本一人。

寂しさにはもう慣れた。

自分から、他人と接することを避けているから、寂しさなんて感じる事も無いし。

ただ……自分から接する事を選んだ。

今日、部室に行かなければ？　そして明日も、明後日も行かなかつたら？

いつの間にか忘れられて——。

駄目だな。

こう、一人になると思考が偏る。

そんなことより、教えてもらった神谷先輩のブログへ……。

待機状態にあったパソコンを起動。

手早くURLを打ち込み——。

「え？」

目に入っただのは、時間ごとの訪問者数。
ここ数時間が、異様なほど伸びている。
……まさか。

最新記事へスクロール……そこには。

「自分……」

横顔だけど、確かに自分と分かった。

コスプレ写真が数枚。

タイトルは——男の娘。

『学校で発見！ 詳細は不明だけど、男子生徒らしいよ』
コメント数、現段階で四十。

……明日学校に行きたくない。

居原田先輩は言った『この学校の生徒は——』
きつと。

明日の話題はこれだろ——。

とりあえず。

明日は前髪を絶対に上げない。隠したまま。

それと、目立った行動はしない。変に動揺しない——。

よし、ご飯作って、風呂入って寝よう！

ここ数日が天王山。

決戦前夜だ……！？

いや、決戦は言い過ぎか。とにかく、発覚したらなんと言われる
か……。

まあ、話題にならなかつたらそれでいいけど……。

8話 予想通りで意思変わる。

案の定——と言うか、思った通り。

通学路、校舎内。何処へ行っても同じ話題。

『男の娘——正体は誰?』

もちろん、自分です——と言う気はない。

まあ、理解している人は多いみたいだが、一部でキモイだの変態——と言われているし。

さて……授業が始まる前にトイレでも——あれ?

この前と似た人ばかり。昇降口に集まっている。

昇降口上の吹き抜けから見下ろして………なっ!?

「さーて、昨日の男の娘写真、一枚二百円でどうだ!」

居原田先輩が、商売していた——てか、校内で売買しているのか? それに………なんであんなにも、購入者がいるのか。しかも、男女両方いるのが意外。

流石に、駆け下りて「止めてくださいっ!」と言ってしまえば、何らかの関係がある。と、判断されるだろうし。

そう。昨日決めた一つ——目立った行動はしない——。

だから——無視。

無視、と言っただけ。

もちろん、放っておくつもりはない。

部活の時間、先輩に言わなければ——でも、何を? まあ………いいか。そのうち考え付くか。

「こんにちは——」

「あ、睦月くん!」

挨拶すら出来ません。

「はい、取り分二千元!」

…… 一百円が二十枚。

「いやあ、あの写真が三十枚も売れてねえ。撮った漣、被写体の睦月くん。そして、売った私——三等分して二千円だよ」

「あの……これからも続けるんですか？」

「え？ 続けていいの？ よしっ…………… 待ってな、家から速攻で取ってくるよ！」

バシューン——とでも擬音が付きそうな速度。

居原田先輩は部室を飛び出し、うあー！ とか、つあー！ と叫びつつ、消えた。

「……ご愁傷様。まあ、うちも楽しいけどね」

我慢すれば、取り分を貰える……？

バレたら、二重の意味で危ないけど——。

楽しいかも……しれない。

コスプレ衣装にはカッコイイのがあるかも知れないし、ある種の変身願望も……。

あれ？ 最初と意思が変わって—— まあ、いいのか……？

9話 文芸部登場

「紹介する人がいます！」

シトシトと雨が降る季節。

最後に部室へ来た神谷先輩がそう言った。

「ああ。もうそんな時期か……」

察知したのか、居原田先輩が手に持っていた本を片づける。

「紹介する、睦月——この二人は」

「あたいが文芸部の部長、山野実里だよ！ あ、三年だし」

とても、髪が長い……。身長は自分と変わらないくらい。

何というか……活発そうな感じだなあ。

「同じく、副部長の伊達いろはです。以後、お見知りおきを。二年ですし、来年も——ね。ふふふ」

神谷先輩とそう身長が変わらない——そんな身長で深々とお辞儀されると、よけいに小さく見える。

でも……怖い。その微笑みが怖いです。

「えっと……文芸部と言っても——」

「この二人だけなんよ。これからもちよくちよく来るから、よろしくなっ！」

神谷先輩が、涙目だ……。そりゃ、セリフを全部奪われては——
ねえ。

「ほら、漣ちゃん。実里先輩は昔からああでしょ………それに——」

神谷先輩の頭を撫でていた伊達先輩が、神谷先輩の耳に口を近づけ。

「……は、むっ……んも………よ——ふふふ」
「………っ」

よく聞こえなかったけど、その言葉が重要な事だったのか。
涙を拭って。

「今日は、文化祭に発表する冊子についての会議！」
そのあたり察したのか、山野先輩は口を開かなかった。

結果。

今のところは何をするかは決めない。

各自何をしたいか考えておく。

だってさ。

10話 帰路の前

あかね色に染まる校舎。

ちなみに、学校の前に坂はないよ？

完全下校時間も近いし、帰りますか――。

「おゝい、むっくん！」

……むっくん？ それって、自分？ てか、周りに誰もいないから自分か。

首から上だけ振り返り――。

「ああ、山野先輩に伊達先輩」

文芸部の両先輩。

山野先輩が手を振りながら駆けてくる。その後ろには伊達先輩が早足で。

「むっくんは今帰りかい？」

「やっぱり『むっくん』は自分か……。」

「ええ。先輩方もですか？」

伊達先輩がコクリ、と頷き。

「あたい達も今帰りだよ……どうやら道も同じみたいだね」

「睦月さんのお宅と実里先輩のお宅は意外と近くなんですよ。ちなみに、私の家も……ふふふ」

へえ……そうだったんだ。

さて、どうして伊達先輩が自分の家の場所を！？

「よおし。普段あの二人がむっくんを独占している分、今日の帰りはむっくんを独占するぞ」

「お」

微笑みを絶やさぬまま、拳を掲げて山野先輩に同調する伊達先輩。改めて見ると……居原田先輩と同等かそれ以上に、胸が大きい……。

拳を掲げている状態で、制服が引つ張られているから――強調さ

れて。

「ふふうん……むっくんは、おおきいおっぱいが好きかあ」

「……っ!？」

「……え」

伊達先輩の笑みが消えて……。

「——睦月さんのえっち」

胸元を両手で隠し、ポツリと呟いた。

なんだろう。この微妙な罪悪感。

「……あたいも、もっと大きかったらなあ」むっくんを喜ばせてあげるんだけどなあ」

「え？」

「うっん。何でもないよ」

……？ 山野先輩は何と。

「……帰りましょうか。ふふふ……くくく」

笑いが、怖い……伊達先輩。

11話 帰路にて

「んでね」

「ああ……そういえば、そうでしたね。ふふふ」
帰路である。

ただ……この構図は何ですか？

自分の右側に山野先輩。

左側に伊達先輩。

別に……立ち位置は問題ないけど。

「あの……先輩方——」

「なんだい？」

「ふふふ……なんですか？」

妖艶な笑み——ってこんな笑顔なのかな。
じゃなくて。

どうして、両先輩は、自分の腕に抱きついてるんですかっ！？

「え〜？ なんとなくだよ」

「実里先輩は言いましたよ。独占する——って。忘れましたか？
フッフ」

ええ……。

「困っている顔……可愛いなあ」
山野先輩に頬を撫でられ。

「目、見せた方が受けは良いと思いますよ？ 私はですが——ふふ」
伊達先輩に前髪を持ち上げられる。

……。

「ねえ、むつくん、文芸部に来ない？」

「……え」

「いや、でも……何というか。」

——ボボボボ

「私も、それは良いかもしれない。と思いますね。くふふ」

——ボボボボ

ん？ この重低音は……。

『二人とも……それ以上は止めておけ』

後ろから、少しこもった声。

振り向くと——誰？

フルフェイスヘルメットでライダースーツを身にまとった長躯の人物。

……誰だ？

「ああ……白神先生じゃないですか……ふふふ。実里先輩、時間切れですね」

「んゝ残念。じゃあね、むっくん！」

先輩達が駆けていく。

その前に、この人物が先生？

身長的には間違いないだろうし。

『やっぱり……分らないか』

……その人物がヘルメットに手をかけ、ヘルメットを外す——

「あ……」

ヘルメットを外す際、乱れた少し長い髪をクツ——と首から上だけを動かしてまとめる。

雪のように冷たい雰囲気醸し出している人物は確かに。

「白神先生……」

12話 明日の朝九時

にしても……。

「かなり、大きいバイクですね」

国道とかでは結構見るけど、近くで見るとその大きさに圧倒される。

黒一色で、滑らかな流線型のボディ。

ウインカーの下には一文字。

『隼』

と。

「いい子……だよ。この子」

そう言って、漆黒のボディを撫でる白神先生。

バイク……かぁ。

いいかも、しれない。

その気になれば免許はとれるし——いや、大型には乗れないけど。

「……………乗りたい？」

「え？」

真っ直ぐに、自分を射るその瞳。

乗ってみたい。と確かに思った——でも。

これ以上、誰かと関わり合いになるのは……………もう十分に関わり合いになってしまった。

何度も思っているが、知り合いが少ないこの高校に進んだ理由。

誰とも、関わり合いたくなかったから。

その目論見は一ヶ月程度で崩れ去ったが。

「……………明日」

明日？ 明日は土曜日で…………。

「朝九時に、迎えに行くから……………」
え？

白神……舞火先生。

一つ、引つ掛かっている。

何故、あそこまで無口なのか。

まあ……先輩達の前で以外、必要最低限口を開かない自分がないが。

確かめられるなら、明日――。

13話 朝九時

……。

九時の少し前です。

迎えに行く——と言われたけど。

……どこに行くの？

——ピンポン……。

あ、来たみたい。

「……ヘルメット。サイズ……合う？」

差し出された黒色のフルフェイスヘルメット。

装着して、ベルトを締める。うん——問題ナシ。

「じゃあ……乗って」

先生が指さした場所。昨日はなかった後部座席があった。

……あれ？

バイクで二人乗り——って。

「掴まって？」

……えっと。

肩——じゃないし。

お腹に手を回すの？

「……」

「……はあ」

先生がため息一つ——そして。

ぎゅ。

前を向いたまま、自分の腕をつかんだ先生は、先生のお腹の前に自分の手を回す。

先生の少し大きくて、暖かい、手……。

「ちゃんと。ね……振り落とされるよ。あと、前傾姿勢ね」
と言うと同時。

かなりの前傾姿勢。

「じゃあ、行くよ」

.....結局。

今はどこへ行くのか教えてもらえませんでした。

14話　もしかして……

低い重低音を聞きながら。

先生の腕の隙間から見える計器板では100キロ。

100キロでも、スピードメーターでは半分も過ぎてない。

名神高速に入った——ならば、行き先は名古屋？

ちよくちよくとカーブが続く……滋賀と岐阜の県境付近か。

——くいつ

先生があごで指す動きで、看板を指す。

サービスエリアか。

「トイレ……入れ替えて。盗難対策。だから、先に……行つて」

エンジンを止め、ヘルメットを外した先生。

振り返りながら、そう言ったが。いや……それは何というか——。

「先生が先に……」

「……学校外だから先生はいらない」

……先生を省く？　だったら——。

「し、白神……さん」

「……なあに？」

……！？

目の前にいるのは先せ——じゃなくて、白神さん……なのか？

初めて見た、笑顔……。

冷たい笑顔、雰囲気なんかじゃなく。

「……先に、どうぞ」

「分かった。じゃあ、ここで待つてて」

ヘルメットを座席に置き、歩き出す背を見送り。

……もしかして、と。一つ思う。

自分と先せ……じゃなくて、白神さんは——同じ？

普段の無口な白神さんは……演技かも、な。

それは本人にしか、分からないことだろうけど。

15話 喫茶店

家を出て3時間ほど。

音羽蒲郡で一般道に降り、現在位置は豊橋市。

左手に城郭を望みつつ、大きな川を渡り……。

「路面……電車だ」

思わず言葉が零れる。

生まれて初めて、路面電車を生で見た。

市街地に入り、路面電車の路線に沿うように右折。

目の前には、豊橋駅とロータリー。

ロータリーの一角で、バイクが止まる。

「降りて」

促され、バイクから降りてヘルメットを外す。

「喫茶……しらかみ？　もしかして——」

「うん。自分の実家。両親と妹が切り盛りしてる——バイク、裏に止めてくるから待ってて」

……。

時間も時間だし、駅前という好立地。外から見ても席の大半が埋まってる。

見た感じ、1階は店舗。2階と3階が住居——って感じか。

「いらっしやいま——ってお姉ちゃんだ！　久しぶり——」

テーブルに注文を取りに行った後か、手ぶら状態の店員——会話内容から察するに、さっき出てきた妹さんだろうか。

「む？　そっちの人は？」

「教え子——カウンター席が空いてるから、そこに入れて。モーニング二つね。自分は後から行く」

「自分の部屋？」

コクリ——と頷き、入り口近くのドアを開く。なるほど、そのドアが階段とつながっているのか。

「では、こちらへどうぞ」

「一つ、いいですか？」

不意に、質問。

「お姉ちゃん、過去にちょっとあつて、一部の人間以外とは口を聴かないんで……教師として、大丈夫ですか？」

過去に——が少し気になったが、それについては……。

「大丈夫、ですよ。確かに口数は少ないですが、教え方は丁寧でわかりやすい。そうみんな言ってます」

「そう？　ならいいけど……」

口数が少ないので、自分達が喋れない——とも言われてるが。

追記。

モーニングセットだが。

ここはやっぱり愛知だった。

15話 喫茶店（後書き）

もちろん、豊橋市に「喫茶しらかみ」はありません——よね？
ちよつと心配。

あと……訛らせた方がいいんでしょうかね……？

16話 みんなが知らなくて、自分だけ知っていること。

海。である。

目の前に広がるのは太平洋。

豊橋駅から今度は西、渥美半島に向かったの、現在位置である。少しだけ熱せられた砂浜に腰掛ける。

季節的には、いつ雨が降ってもおかしくない。けど、晴れ上がっている。

若干、風が強いが。

「自分のこと、聞いてくれる？」

「……え」

「昔——と言っても、10年ほど前。自分は虐められました」

……………。

「その時は今ほど口数は少なくなかった……」

知りたかったこと。

それを、本人が、重い口を開く。

小学校の4年の頃。

自分はその時からずば抜けて身長が高く、それが原因か知らないが虐められた。

教師の目の届かないところで。上履きが消える。靴がズタズタに引き裂かれる。着替えが無くなる。ノート教科書類が破かれる、落書きされている——など。

誰も、真っ向から向かってこなかった。

それでも友人は多く、小学校をなんとか卒業できた。

問題は、中学校時代。

他校生も加わったのと、友人は真面目な人間——つまり、自分の成績しか考えない人間になったことが重なり、本当に一人になった。

仕舞いには他人と目を合わすのも苦痛になり、前髪で目を隠した。常に黙秘を決め込み、必要最低限の言葉しか口にしない。

それでも、重い足を学校に向けた。

と言つても、保健室登校が半数を占めたが。

ある日。

養護教諭が会議に出ている間、襲われた。

下卑た男が数人——と覚えている。

養護教諭が戻ってきたのが早く、自分の躰は穢されることは無かった。が。

ああ、やっぱり他人は信用できない。みんな、自分に危害を加える存在だ——と。

しばらく、引きこもりの生活を続けた。

場合が場合だけに親は文句は言わなかったが。

それからしばらくして、気付いた。

第二の自分を生み出さないために、教師になろう——と。

幸い、得意科目であった歴史なら可能性はある。と言われ本気で勉強した。

髪も切り、新しい自分になった——つもりだった。

ただ一つ、自分と関わり合いがない人間に対し、必要最低限の言葉しか出ない。

それでも自分は——。

「——教師になった」

.....。

「睦月を初めて見たとき、自分を見ている気がした」
ふと。

自分にあつた事を思い出す。

「悪いけど、調べさせてもらったけど.....強姦未遂以外、みんな一

緒なんだよね」

確かに。ただ、自分はこれから努力できるのか。

「同族に惹かれた——言葉が悪いけど、そう思ってる。だから、睦月になら、きちんと今話せている」

すっ——とこちらへ身を寄せる白神さん。

「だから……んー言葉に迷う」

そこでブツツリと言葉は途切れた。

「日が傾いてきた……そろそろ帰ろうか」

「……はい」

隣の温もりが消えたことを少し残念に思うが。

「今日行ったことは口外禁止。言ったら、いろいろと奪うよ」

少し、意地悪な笑顔。

あー……なんだろうな。これが世に言う『ギャップ萌え』か？

4人の先輩よりも、かなり魅力的に思えてしまう。

「んで、白神さん——も他人行儀だし、舞火でいいよ」

と、言われても……。

「言うまで、バイクに乗せないよ」

「え？　ちょ、それは——」

「なら、言って」

……む。

「ま、舞火さん」

「もう一回」

また、少し意地悪な笑顔。

「舞火さん」

「もう一回！」

ずっと、無表情な人だと思っていたけど。

「舞火さん……」

「もう一回……ふふふ」

こんなにも、普通に笑顔が出るんだ。なんか、勿体ない……そん

な気もする。

それは、これから先克服されるかは分からないが、今はこの笑顔を独占できる——そんな嬉しさもあった。自分だけが知っている事。教師、白神舞火の心からの笑顔を。

「ま、舞火さん」

「ふふ……もう一回！」

17話 怒って……る？

さて。

あの日から2日。月曜日、部活時間である。

舞火さん……つと、ここでは白神先生だ。

白神先生は普通に喋っている——自分だけ、に。

「睦月……何があったの？ 怒らないから、うちに言って」

怒らない——って。神谷先輩、明らかに、もう怒ってますよね……。

「睦月さん。言って……くれますよね？」

てか、何で二人は怒って……？
別に自分は何も——。

「聞いたよ。白神先輩を墜としたんだって？」

「白神先生ルートですか……ふふふ。難易度はきつと高いですよ」

……あれ？ 文芸部の両先輩も——怒ってます？

四面楚歌。

この状況をどう打開する？

「睦月さん……呼ぶまで、部室から出て行って下さ——い——ふふふふふ」

「……え？」

えつと……触らぬ神になんとやら——ってか？

廊下である。

ポツーン……と一人。

聞き耳たててみる？ 聴力には自信あります！ 基本、役に立たないけどね。

……。

「まさか、先生がねえ………するとは………なかったなあ」

「予想外の………ス。私たちも………かしいと。ふふふ」

「山野先輩？ 何か……………アは？」

「とりあ……………抜け駆けは……………っに」

「漣ちゃ……………言う通りだねえ」

……………？

何の話だろうか。

結局、部活終了時間まで入れてもらえませんでした。

18話 意思を変える意志

幾度となく感じた、この感じ。

しかし、今度ばかりは……………社会的に、死ぬかもしれない。

「ははは。むっくん、顔真っ赤」

……………。

「前と変わりませんのにね……………ふふふ」

「え？ いろは……………前も、って？」

「別にいいじゃん、漣。部室では私達が独占してるし」

「独占してるのは渚だけでしょ……………うちは、初めてなんだから」

状況説明。

この前と同じように、右に山野先輩。左に伊達先輩。

そして。

低身長を生かし？ 左脇に潜り込んで、胸のあたりに抱きつく神

谷先輩。

背後から抱きついて居る居原田先輩。

てか……………。

「先輩方……………歩きにくくないんですか？」

うん……………でしょ？

「問題なし」

「ふふ、問題ありません」

「うちは問題なし」

「私も、大丈夫」

あ、れ……………？ 問題なしなの？

歩きにくい——って誰かが言ったら、じゃあ、離れてもらえますか？ って言おうと……………。

「へへへ」

……………。

神谷先輩の笑顔——か。何だかんだ言って、初めて見る気がするなあ……。

「漣ちゃん、ご機嫌だねえ。分かる」
言ってはいけないこと。

この二人——神谷先輩と山野先輩。

胸が……残念である。

神谷先輩は身長に比例してるからだろうけど。

山野先輩は……うん。自分は結構顔に出る性格らしいし、言わないでおこう。

一方。

居原田先輩と、伊達先輩。

背中と、腕に——ああ。

つと……顔に出やすいんだから。注意しないと……。

で、確かこの両先輩。幼なじみで仲が良いって聞いたな。

もちろん、クラスの情報通が話していたのが聞こえたんだけど。

周囲の目が痛いけど。

羨ましいか？ 羨ましいだろう……すみません。自重します。

まあ……他人と接しないと決めただけ。ここまでいい人達と知り合えるとは思えなかった。

嫌な気はしない。いや、むしろ嬉しいです。

だから、かなり意思を変えることになるけど。

まずは……前髪、目が見える程度にはしてみようかな。

きちんと、この目で真っ直ぐに先輩達を、見たい。

19話 メール

さて。

後は寝るだけである。

寝る前に……メールを確認しておくか。

あー……。

やっぱり多いなあ。

『神谷先輩から離れる』

とか。

そんなが多い。

メアドから逆探知できるのに……馬鹿かよ。

でも……どこから自分のメアドが漏れてるんだ？

まあ、こんなものかね。

……あれ？

初めて見るメールアドレス。

スパムではない……。

ただ一言。

『誰を選ぶ？』

それはつまり……。

神谷先輩。 居原田先輩。 山野先輩に、伊達先輩。そして、白神さん。

……。

このメールの差出人に悪いが。

今すぐに答えは出せない。

というか、意識したことは——いや、あるけど。

だからと言って……なあ。

よし。寝よう。

……意識してしまうかも。
全員を？ いや……うん。
疲労が倍増しそうだ……。

20話 はい。見ました

朝、である。

教室に生徒が集まり始める朝練の時間。

もし、部室に誰もいなかったら教室に行ける時間。

ドアノブを捻る。

鍵がかかってない。自分は何番乗りでしょうかねー。

「おはよーございま……す」

超、コテコテな展開——。

……………。

「む、睦月……」

制服のワイシャツに両腕を通し、ボタンを留めずにスカートを持った状態で凍り付く神谷先輩。

申し分け程度にレースで飾られた、真っ白な上下揃いの下着——。

ああ、納得。

机に置かれたコスプレ衣装。

某魔法少女アニメに登場する鉄槌の騎士。赤と黒のロリータ的な衣装。

低身長だから——か。居原田先輩も考えたな。

……じゃなくて！

目線を外し、一步下がり、ドアを閉める。

「あう……」

先輩が顔を真っ赤にして、口をパクパクさせていた気がしたが、自分は見えていない！

「入って……いいよ」

ガチャリ——と、ドアが開かれて。

制服、ブレザーを纏った先輩が。

とりあえず——いつもの席に座って。

……。

「見た、よね？」

「……………はい。見ました」

ここで嘘言うのは……………だめですよ。

「昼休み……………普段は活動しないけど、部室に来て」
えと。

拒否権はナシ——と。

嫌な予感しかないよ——ああ……………。

21話 深読み

どこか授業が上の空だったかも。

とりあえず、昼休み。

逃げ出す……？

いや、先延ばしになるだけか。

……こんなにも、部室に入るのに緊張するのは初めてだ。

いや、逃げちゃダメだ。逃げちゃ……はい。行きましようか。

「こんにち……って。暗いな」

部室全てのカーテンが窓を多い、カーテンの隙間から光が差す程度。

とにかく、暗い。

先輩は——っと。

部室の中程まで来てるけど、先輩が見あたらない……。

——ガチャン。

……鍵の音？

鍵、ドアの方向。そこには、神谷先輩が立っていて。

「いつも通り、座って。今の睦月に拒否権はない」

………やっぱり、来なかった方良かったのか？

現在の状況を確認しよう。

ただ一言。

——縛られた。

椅子に。

入念に縛られ、一寸も動けない。

動いたら、朝のことを学校に広める——なんて言われたら、動けるわけなくて。

気が付けば。

「あのですね、先輩。どうしてこんな事を……？」

「私には、渚みたいに押さえつけておく腕力がないから」

「……え？」

それはつまり……。

「いただきます——みたいな？」

ボソツと先輩が呟き、自分の両太もにまたがる。

「髪型変えたんだね。うん……目が見えてる方がいいよ」

「それは……どうも」

髪に触れた先輩の指は、頬を伝って首筋をなぞる。

舌で頬を舐られた時とは違う快感。

「ほんと、羨ましいほど肌も綺麗……」

心なしか、先輩の目がトロンとしてる気がする。

「先、輩……？」

「甘えていい？」

その頬を擦り寄せ、上目遣いでそう問われれば――。

「ど、どうぞ……」

……ちよつと待て。

こう言っただのはいいが。自分は縛られているから何も出来ないぞ。あ、いや……出来ないと言っても、性的表現ではなく……。

あれだ。

甘えたい——と言ってるのに、頭を撫でることも出来ないじゃん？ つて意味で……。

あれ？ 何の弁明なんだろうか。

「ごめん。解くね」

今の葛藤が伝わってしまったのか。先輩が少し笑みを浮かべ、再び顔を上げる。

そして一度、先輩が降りて椅子の背後に回る。

自分の体を固定していたヒモが解かれ、ようやく体に自由が戻る。軽く手足を動かし、一息。

同時、昼休みの終了を示すチャイムが校舎内に鳴り響く。

「……あ」

「鳴りました——ね」

あと5分で授業が始まる——けど。

両腕を大きく広げ、神谷先輩が一言。

「抱いて」

………深読みしたらダメだよね。

22話 いろいろと笑み

ぎゅっつて。

身長的に、小さい子が親に抱きつくみたいで。

可愛くもあるけど、守ってあげたい——と。

「……先輩？ あの、どこを触っているんですか？」

「え？ なに、言って欲しいの？」

「……………」

いや、あのさ——。

「ふふふ——時間切れですよ」

「え！？」

暗闇にライトで浮かび上がる笑み。

「ああ……いろは——手癖、悪いね」

ニヤリ——と、神谷先輩が笑みを浮かべる。

その視線の先、伊達先輩の手にはドライバーが二本。

え？ つまり、鍵をドライバー二本で突破した……と。

「ふふふ……漣ちゃん。小説を書いていると、私は聞いたんだけどねえ……………」

うわぁ……………何というか、笑顔なんだ。獲物を見つけた肉食獣みたいな笑顔。

「漣ちゃん……部屋を外から見られないようにして——ナニをする気だったのかなぁ？」

「いや……………これは単に——」

「だから、時間切れ。ふふふ——睦月さん？」

え？ ここで自分ですか？

「次は、私ですよ——くくく」

さっき自分が縛られていた椅子に、神谷先輩を拘束しつつ伊達先輩は再び笑みを浮かべる——。

23話 最大のピンチ！ 多分。

「さて……どうして欲しい？ ふふふ——やっぱり、えっちいこと？」

神谷先輩に猿ぐつわを噛まし、伊達先輩がまた少し違う笑みで振り返る。

「具体的に言ってみよう。言えないなら——ヤッてみようか。ふふふ」

ヤッて——の発音が……。と言う前に。

何の前触れもなく、跳躍する伊達先輩。

飛び込んでくる以上、抱き止めるしかないと思い……………。

ゼロ距離で、腹を殴られた。

特別強力な一発ではなかったが。

予期せぬ一撃に一瞬で身構えた力は消え去る。

なんとか抱きしめても、ふんばる事はできず——。

「〜!？」

……。フガフガと神谷先輩が叫ぶ声が聞こえる。

中学校の体育課程に感謝。柔道の受け身が初めて役に立ちました。仰向けの状態。そこまでの痛みこそなかったが、本能的に目をつぶっていた。

「ふふふ……」

自分の上に乗っかっている伊達先輩。

自分の胸のあたりに、とっても柔らかいモノが……。

「やっぱり、胸が好きなんだあ〜ふふ」

え？ あー……はい。嫌いとは言いません。

「漣ちゃんが見ている前で奪う——へへっ。興奮してきたかも」

「奪うって……なにを？」

「あはは、分かってるくせに……私からしたら、奪われるんだけどね」

……………。

今までになく、神谷先輩が暴れてます。

てか、そんな冷静に分析する暇なんてなく――。

これは、最大のピンチ！
多分。

24話 先輩達の授業、どうなっているんですか？

「ふふふ……あはは。笑いが止まらないよ」

太ももの付け根あたりに乗っかられて、足は動かせない。

腰から上で体を起こせるが——どう動いても、いい方向に向かう気がしない。

今は授業中。誰かが助けに来るなんてありえないし……。
どうする……？

そう考えている間も、伊達先輩は止まらない。

これって完璧に逆レイプだね……？

てか、流石にまずい。

上は良くても、下は脱がされたら——。

「だあくめ。今更逃げようなんて……ふふふ」

なに？ 何でこんなにも拘束力が強い？

「もしかして睦月さん……私のこと、嫌いですか？」

「え……」

こんな状況は長く続かない。

『誰を選ぶ？』

その言葉が頭に浮かぶ。

この場の状況に流されるのは簡単だ。

でも、本当にそれでいいのだろうか。

自分は——。

「ふんんうんんん！（殿中でごさる！）」

つま先で立ち、椅子に縛られたままこちらに突進してくる神谷先輩。

「……え？」

そしてそのままゴーン——と伊達先輩に正面衝突。

……助かったのか？

二人とも伸びている。

よし。今の間に証拠隠滅だ。こんな場面誰かに見られたら……。

「見てたよ〜ん」

「や、山野先輩っ!？」

先輩達の授業、どうなっているんですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4004q/>

みんなせんっ！ ～知り合いはみんな先輩！？

2011年2月19日20時10分発行